県立広島病院広報誌
もみじ
第85号
2016.3.1
発行
県立広島病院 〒734-8530 広島市南区宇品神田1丁目5番54号
※県立広島病院の様々な情報をホームページへ掲載しています。
県立広島病院 で 検索 (URL：http://www.hph.pref.hiroshima.jp/)

理念：県民の皆様に愛され信頼される病院をめざします

Contents

●院内の案内表示がわかりやすくなりました！
●県病院の専門外来（炎症性腸疾患外来）　●県病の星（透析看護認定看護師）
●外科医の独り言（因果応報？）　●がん専門医によるがん相談　●連携医院のご紹介（大下医院）

院内の案内表示がわかりやすくなりました！

南棟、レストラン、コンビニへの案内を表示しました。

<足元表示>

県病院イメージカラーの緑に大きな文字で表示しています。

連携医院のご紹介

今回は外来・訪問診療を通して「患者さんの悩みを聞く」ことを大切にされている 大下医院の大下 祐一先生です。

大下祐一院長

医療法人社団 大下医院

〒734-0036
広島市南区旭1丁目19-25
電　話／082-255-5055
院　長／大下 祐一
診療科目／内科・呼吸器内科・循環器内科
消化器内科・糖尿病内科

自転車で訪問診療へ

○いつ開業されましたか。

昭和 50 年に父がこの地に開業しました。大学は久留米大学に行き、平成 17 年に広島に戻り継承しました。父が実施していた在宅医療も引き継ぎましたが、当初は患者さんの家に入ることに戸惑いも多かったです。訪問診療は、病院内のように自由に検査ができず、問診や理学的所見から瞬時に病状を判断することが求められ、慣れるまでは難しかったです。

○毎日の診療で大切にされていることは何ですか。

患者さんの訴えを正確に良く聞くことです。振り返ると、患者さんからの訴えが、その診断に結びついていることが多いからです。

あとは患者さんに笑顔で接するようにしています。私は笑顔が少ない医師だと自覚していますので、ＰＣのデスクトップにはスマイルロゴマークを常時貼り付け、それを見て意識しています。

○開業医のやりがいは何ですか。

一人の患者さんを長く診られる事ですね。患者さんは健康を求めて来られます。めまい、しびれ等の心配な症状を言われると、それに応えるために身体の仕組みを含め多岐に渡って勉強しなければなりません。それが患者さんのためだけではなく、自分の健康のためにもなります。

○県病院はどんなところですか。

救急患者への対応がとても良く、一番頼りにしている病院です。最近は、ほとんどの患者さんを県病院へお願いしています。

○在宅医療について一言。

地域で生活するために住民の方々が介護・在宅サービスを利用するようになり、自宅での生活をサポートする体制が整ってきました。ただ、一人暮らしや高齢の二人暮らしの方が多く、自宅で看取るまでの診療は、まだ難しいと感じています。

大下医院外観

【取材後記】
取材後寒い中、一人自転車に乗って訪問診療へ出かけられる先生をお見送りしました。地域を良く知っておられ、フットワークのよい先生だと感じました。

県立広島病院からのお知らせ

3月のがんサロン

開催日　平成28年3月16日(水)
時　間　14:00～15:30
場　所　新東棟2階 総合研修室
内　容　交流会
対　象　悪性腫瘍(がん)で通院 または
入院されている患者さん 及び そのご家族
問合せ先　地域連携センター
総合相談･がん相談室
TEL:082-256-3562
(担当:佐々木)

ペインクリニック外来 中止のご案内

ペインクリニック外来では、帯状疱疹神経痛、複合性局所疼痛症候群などの痛みがある患者さんの紹介を受け付けていましたが、外来を担当している麻酔科医師の退職に伴い、紹介患者さんの受け付けを中止します。なお、現在治療中（再診）の患者さんについては、引き続き対応させていただきます。

お問合わせ先　地域連携センター
☎ 082-252-6241

県病院の専門外来　内視鏡内科

炎症性腸疾患外来

毎週水・金曜日 午後（完全予約制）

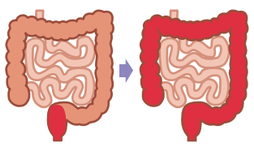
内視鏡内科 部長
渡邉 千之

■炎症性腸疾患とは

“炎症性腸疾患”とは少し耳慣れない病気だと思いますが、原因不明の難治性の慢性腸炎のことで、医療者の間ではIBD（アイ・ビー・ディー）と言われています。このIBDは潰瘍性大腸炎とクローン病の二つの疾患の総称でもあり、近年、日本でも発病する患者さんが増加しています。潰瘍性大腸炎の症状は長く続く下痢と血便で、症状が悪化すると腹痛や発熱などの症状も合併してきます。一方、クローン病の症状は下痢や腹痛もありますが、全身倦怠感や体重減少が主な症状で診断が難しい場合もあります。

痔ろうや口内炎がきっかけで受診し、病気が見つかる患者さんもいます。いずれも10歳代後半から20歳代に発症することが多いのですが、50歳を超えて発症する患者さんもいます。発病の原因は不明で、食事抗原や細菌などに対する腸管での免疫異常に起因していると言われています。ストレスや食中毒などの特定の原因で起こるものではありません。

厚生労働省の難治性の特定疾患に指定されており、完治することは難しいのですが、最近では種々の免疫調節剤が開発されてきています。以前は治療薬も少なく長期の入院や腸管切除術が必要となる患者さんも多かったのですが、新しい診断方法や強力な治療薬の開発で、入院や手術が必要となる患者さんは減少しています。病気としては比較的新しい分野ではありますが、今後も更に新しい診断法や治療薬の開発が期待されています。



原則的に大腸のみに起きる
連続性・表層性の炎症

消化管のどこにでも起きる
非連続性・全層性の炎症

■炎症性腸疾患外来の内容

潰瘍性大腸炎やクローン病と診断されている患者さんの診療はもちろんですが、長く続く下痢や腹痛、体重減少、血便など“何か腸の具合が悪い”患者さんも来院されています。

長い間、腹痛や体重減少があり、精神的なものとされていた方が、外来を受診されて小腸型のクローン病と診断された患者さんもいます。

■炎症性腸疾患外来の受診方法

当院では水曜日と金曜日の午後に“炎症性腸疾患外来”の専門外来を実施しています。

予約診療となっていますので、何か腸の具合が悪いと感じられる方は、かかりつけ医に御相談され、診療予約のうえ受診して下さい。

県病の星　透析看護認定看護師

いつでもご相談ください！

沖原看護師

腎臓の働きが悪くなると、体の中の毒素や水分が尿と一緒に出なくなり、腎臓の代わりをする治療（腎代替療法）が必要になります。腎代替療法には、血液透析・腹膜透析・腎移植があります。透析看護認定看護師の資格を取得したきっかけは、腎不全看護に携わるようになり、透析治療の時だけでなく、患者さんの生活を支え、頼られるようになりたいという思いが強くなったからです。患者さんが『その人らしい生活が送れる』ような治療法を患者さんとご家族が決められるように支援し、選択された治療を続けていけるようお手伝いいたします。

当院では、血液透析と腎移植を行うことができます。血液透析は、週に3回の治療を行うために通院し、食事内容や塩分摂取に気をつけなくてはいけません。そのため、血液透析が生活の一部として患者さんやご家族とうまく付き合っていけるようにサポートをします。腎移植は腎臓を提供してくれる人（ドナー）が必要です。腎移植を受ける患者さんやドナーの方の不安が少しでも和らぐような援助もしています。腎臓のこと、治療のことで悩まれた時には、いつでもご相談ください。

透析室にて

外科医の独り言…no.54

― 因果応報？ ―

25年以上前の話です。当時大学院で肝移植の研究をしていました。来る日も来る日も朝から晩まで犬の手術をしていました。その犬たちのほとんどは捨て犬、野良犬で保健所に引き取られ処分を待っていたのです。それを医学の進歩のためということで譲り受け大学病院内にあった犬舎で飼うことから始まりました。

どの犬たちも栄養失調がひどく衰弱しており、とても手術ができる状態ではありませんでした。1日最低1回の散歩、食事には高級ドックフードやスーパーで買ってきた肉を与え、犬たちにかかる食費は我が家の食費をはるかに凌駕していました。もちろん費用は自腹です。

休みの日、当時4～5歳だった長男を連れて行った時、犬が食事をしているのを見て「美味しそう」と言ったのを昨日のことのように覚えています。

ここまでお世話をさせてもらうと犬たちの栄養状態も良くなって元気になり“ご主人様”が誰だか認識してくれるようになります。でもここからが辛いのです。やっと慣れて尻尾を振ってくれるようになった犬たちを手術しなければならないのです。

普通、手術は病気を治すためにするのですが犬たちの肝臓は悪くないのです。（時々フィラリアで肝硬変の犬もいましたが…）麻酔のかかった犬に手を合わせて手術を始めるのです。

その頃私が犬の肝臓の手術をしているということをどこから聞きつけて来られたのか良く覚えていませんが、動物病院の先生からある依頼が来ました。

犬の肝臓の手術をしてくれと。患者さん?患犬さんは大きなラブラドールで膵臓の腫瘍が肝臓に転移しているとの事。治療法としては手術しか方法がなく、手術ができる獣医師も広島県におらず、当然治療費も高額になるということで飼い主さんの許可を得て動物病院の先生がその犬を譲り受けたそうです。

腫瘍はインスリノーマといってインスリンを分泌する腫瘍（もちろん人間にもある病気です）で、低血糖による意識障害（散歩させていたら突然バタッと倒れる）で発見されたそうです。

大学病院から犬の手術で使っていた器械を持参して動物病院に向かいました。獣医師さんと思われる多くの見学者の前で手術をする羽目になりました。そんなことは聞いていなかったのに…。

お腹を開けてみると膵臓と肝臓にしこりがあり、症状、血液検査の結果もあわせてインスリノーマの肝臓転移と診断しました。いつも見慣れた犬の肝臓でもあり手術は簡単にできると判断し膵臓と肝臓の切除を行いました。おそらく手術は1時間くらいで終わったように記憶しています。もちろん無報酬、ボランティア手術です。今になって考えれば私は医師免許は持っていたものの獣医師免許を持っていないので、大丈夫だったのかと一抹の不安に駆られますが、もう時効です。また、後から聞いた話ですが、当時犬のインスリノーマの手術例は世界で2例目、肝臓まで手術したのは世界で初めてだったそうです。しかし、その患犬がどのくらい生きていたのかは聞いていません。

その後、実験結果をまとめて論文を書き医学博士の称号を頂いたのも犬たちのおかげです。また犬ではなくヒトの肝臓の手術ができるようになったのもひょっとするとこの犬たちのおかげかもしれません。

それとどういうわけか当時4～5歳だった長男は今、犬たちを治療する職に就きました。

当時、私は良い事をしたのか、悪いことをしたのか良くわかりませんが、
これって因果応報？
と思う今日
この頃です。

副院長（消化器・乳腺・移植外科主任部長）板本 敏行（いたもと としゆき）

完全予約制　がん専門医によるがん相談をお受けしています。

がん相談担当：児玉先生

がんに関することを主治医や看護師に相談できなくて困っていませんか？「もっと詳しい説明を聞きたい」「他にできることはない？」「今の治療はあっているの？」など、がんの治療中には様々な不安や疑問が生じます。

当院では、がん専門医による『よろず相談所』を開設しています。どうぞお気軽にご相談ください。相談料は無料です。

毎週火曜日 13:00 ～ 16:00　☎082-256-3561（予約申込）